

# 洛北染物労働組合争議と河上肇

——河上肇直筆の洛北染物労働組合への檄文——

櫻 田 忠 衛

## I はじめに

京都大学経済学部には河上肇文庫が設置されている。この文庫は、1969年京都大学経済学部創設50周年の記念事業の一環として河上肇のご遺族から寄贈、寄託されたもので、その内容については京都大学経済学部編『河上肇文庫目録』（1979年刊）で見ることができる。

この文庫へ、2005年4月に吉村久美子<sup>1)</sup>さんから河上肇直筆の洛北染物労働組合への檄文＝軸装を寄贈したいとお申し出があった。この軸装は、1972年6月1日から4日までの間、京都府立総合資料館において河上肇記念会、京都府立総合資料館、京都大学経済学会が共同で開催した河上肇遺品展示会に所有者の吉村久美子さんから出品され、展示会終了後に京都府立総合資料館に寄託された。その後、30年を経て京都府立総合資料館から所有者の吉村久美子さんに返却された。これが今回、吉村久美子さんのお申し出によって京都大学経済学部河上肇文庫に寄贈されることになったのである。

この軸装は、京都府立総合資料館で開催された「河上肇遺品展示会」<sup>2)</sup>や1997年の「京都大学創立百周年記念展覧会」<sup>3)</sup>においても展示さ

れ、最近では『杉原四郎著作集3 学問と人間 [河上肇研究]』（藤原書店，2006年）の「月報3」にもその写真が掲載されるなど、多くの人々が目にしているもので、決して珍しいものではない。しかし、これらにおいてはこの檄文＝軸装についての詳細な解説はなされていない。今回、吉村久美子さんから河上肇文庫に寄贈されたのを機会に、この軸装の檄文が書かれた背景と河上肇がおかれていた状況を描写しながら改めて紹介することにしたい。

## II 檄文の言葉

「闘争か然らずば死か

血みどろの戦か然らずば無か

問題は不可避的に右の如く課せられてある」

これは周知のようにフランスの女流作家、ジョルジュ・サンド George Sand (1804-1876) が、その歴史小説『ジャン・ジースカ』の書き出しで用いた言葉で、マルクスが『哲学の貧困』で結句として引用したことで有名になった。

河上肇は1929（昭和4）年に書いた「経済と権力」の結びで、ジョルジュ・サンドの言葉を末語としたマルクスの『哲学の貧困』を引用した。また、1929（昭和4）年12月の「九州地方之遊説のために」の演説の自筆草稿<sup>4)</sup>でも末尾で引用している。河上はこの時期、この言葉を好んで色紙に書いたり、演説に引用しているが、この言葉を利用した場面が河上によって生き生

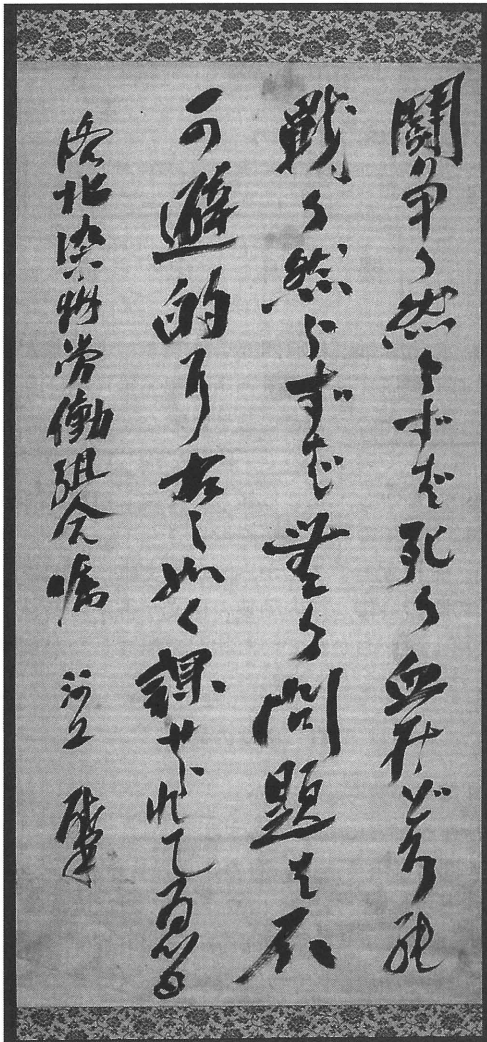
ゝして開催された。河上肇は「学問の自由を求めて」のテーマで瀧川幸辰とともにとりあげられ、著書、ノート、原稿、書などが展示された。

4) 「九州地方之遊説のために」『河上肇全集』（以下『全集』と略す）16，岩波書店，1985年，488-498ページ。

1) 元京都大学経済学部教授吉村達次氏（1916～1966年）の夫人で、1967年4月から1979年4月までの3期12年間京都府会議員（日本共産党）をつとめた。

2) 展示会に出品された河上の著書、書画、愛用品の写真を類別し、解説、略年譜、出品総目録を付した図録を刊行した。河上肇記念会、京都府立総合資料館編『河上肇遺品展図録』1973年。

3) 1997年10月28日から11月24日まで京都大学総合博物館、附属図書館、宇治キャンパスを会場として、「京都大学創立百周年記念展覧会 知的生産の伝統と未来」と題し



河上肇が洛北染物労働組合へ贈った楹文。

2005年4月、吉村久美子さんから京都大学経済学部・河上肇文庫に寄贈された。

きと語られるのは、1930（昭和5）年1月8日付の岩田義道宛の手紙である。1928（昭和3）年4月に京都帝国大学を辞職させられた河上は、実践活動に踏み出し、労農党本部の要請で上京することになる。1930（昭和5）年1月2日の朝、京都を発つのであるが、その様子を「京都を立つた時は、『送河上肇氏東上』といふ長いはたをたて、静々と同志が送った。僕はガセン紙半せつに『哲学の貧困』の結句を大書し、之

を車上から高く掲げて（君が知つてゐる筈の義弟同道、彼が僕の代理をつとめたのだが）その句を朗読しつつ、発車した<sup>5)</sup>と、この言葉を京都駅まで見送りに来た50名ほどの同志たちに掲げて、京都を発つことを感動を込めて書いている。河上がこの言葉を好んで引用したのは、この時期の河上の思いが反映されている。

この言葉を生み出したジョルジュ・サンドは、フランスの女流作家で初期のフェミニストとして知られる。1840年代には政治的志向を強め、民主主義、社会主義の思想に傾倒し、アラゴ、バクーニンらとの交流を深め、1848年の2月革命に参加した<sup>6)</sup>。マルクスは『哲学の貧困』（1848年）でプルードンを批判してこの言葉を引用し、実践的な戦闘性をもたない社会科学は無意味だと結論づけた。河上は、1928（昭和3）年に京都帝国大学を辞職させられ、その後時間を経ずに労農党宣伝のための九州遊説をはじめ、労農党立候補者の応援演説や労農党機関紙部員として『労働農民新聞』の編集、そして1930（昭和5）年1月の衆議院議員総選挙では自らが労農党の候補者として立ち、実践活動に急速に接近していくことになる。

実践活動に踏み出した当時の河上の心境をストレートに反映しているのは、その時にリアルタイムで書かれた書簡である。なかでも、河上の大学時代の教え子であって実践活動に身を投じていた岩田義道への手紙には、河上の実践活動への思いがリアルに記されている。新労農党の結党大会（1929（昭和4）年11月1日、2日）ののち、12月13日から20日まで九州遊説に入り、その様子を岩田に「僕は十三日に初めて九州の地をふんだ。福岡市で演説した夜、初めて九州の地にねむつた。農民組合の福佐聯合会の事務所で。女手一つない組合の事務所の「めし」を「かま」からぢかに食べつ、愉快なる一

5) 昭和5年1月8日付岩田義道宛書簡『全集』25、200ページ。

6) 長塚隆二『ジョルジュ・サンド評伝』読売新聞社、1977年、秋元千穂・石橋美恵子他『ジョルジュ・サンドの世界—19世紀フランス女性作家—生誕二百年記念出版』第三書房、2003年を参照。

夜を過ごしたのであつた。之が遊説第一夜の経験であつた。それからズット一日に二ヶ所又は一ヶ所づつ、九州各地で十一ヶ所の演説をすまし、最後を小倉ですまして、その夜帰洛した。それから京都でも大阪でも演説会をもち、ゴタゴタする最中に荷物を片づけ、一九三〇年一月二日の朝に京都を立つた<sup>7)</sup>と報せている。また、1930(昭和5)年5月13日から20日までは、京都の洛北染物労働組合の争議支援に参加するが、その争議についても岩田への手紙の中で「御手紙二通同時に受取つたが、その翌朝東京を發して京都へ来たので、今日まで御無沙汰しました。京都では最近吾々が造つたばかりの洛北染物労働組合がストライキを起したので、その応援に来たのです。着いた夜は争議団本部の楼上から屋外の大衆に向つて激励の演説をしたが、その後は毎晩労働講座をもつてゐる。一この洛北の地は暴力団が勢力をもつてゐて、すでに三人の重傷者が出た。これまでさういふ威嚇のため誰も手をつけかけては手を引いた処だ。もう二十四日になる。戦は困難だ。当分滞在する事をヨギなくされてゐる。少しむりをしたので、右腕のシンケイ痛がひどくなつてゐて、ものを書くのに多少困難を感じている。」<sup>8)</sup>と記し、争議支援の後、東京へ帰つてからも「僕は暫く神経痛がひどくなつたため、精神的にも沈滞してゐました。これは過般京都の争議支援に出かけた折「京都からハガキを出したが届いたか?」、徹夜をしたり、シラミの巢になつてゐる湿気多きフトンにねたりしたためだと考へるが、どうも年をとつてからのフンパツなので、からだか意志通りにならぬことを残念に思つてゐるのです。電気療法で治つたのか、それとも治る頃であつたのか、ともかく一週間前から神経痛も殆ど去り、それに比例して精神的にも元氣を出してゐる。御安心を乞ふ。京都で徹夜した日の翌朝キシヤに乗つて帰東したが、さうい

ふ時にはいつも君のことを思ひ出す。それは総選挙が済んでの帰東の途次、君が京都へ立ち寄つた時、大分疲れてゐたやうに見えたに拘らず、強ひてとめもせずに汽車で帰へらしたが、そしてあの時はアトで気の毒な事をしたといつまでも思つたが、この頃は俺自身がそれをやつてゐるわいと云ふ連想だ。この事はモウ一度手紙に書いたかも知れない。／再び僕は大多忙の日を送ろうとしてゐる。それは、七月一日から労働農民新聞を倍大して(今日迄は小さくなつてゐたが、それをブル新聞大にする)「組合の拡大強化」のための全国的政治新聞たらしめようと準備に取り掛かつてゐるからだ。六パーセントしか組織されてゐない日本では何にしても未組織の組織が当面の急務の一つだ。新聞をして此の任務を果さしめようといふのが僕の意図だ。皆の賛成を得て、今は僕のうちの門柱には一方に「社会問題研究編輯所」、他方に「労働農民新聞編輯所」といふ札がかゝつてゐる<sup>9)</sup>として実践活動のためにますます多忙になるであろうことを覚悟していると書き送つてゐる。また、『自叙伝』においても、この当時の心境を「私は元來書齋人であり、(省略)引続き黙つて書齋に引込んでゐたところで、世間に対し面目が立たぬと云つたやうな行き掛りがあつた訳でもなく、さうした生活を維持している方が、自分にとつてはどれだけくだか分らないけれども、さうした態度こそが気分の上からは日和見的なものに感じられ、それを振り切つて街頭に出たのであるから、實際私は、栗毛の馬に鞭當てて勇ましく出陣するもののふの氣を負うて、この京を立ち去つたのである。劍を杖つて万里に征く、それが当時の私の主観であつた」<sup>10)</sup>と書いてゐる<sup>11)</sup>。

ジョルジュ・サンドの言葉が、実践的な活動

9) 昭和5年6月23日付岩田義道宛書簡『全集』25、210-211ページ。

10) 「自叙伝」自画像、『全集』続5、346ページ。

11) 『自叙伝』では、東京へ出て、実際に新労働農民党への活動に就いてからすぐに新労働農民党の活動に不満を抱くようになり、この昂揚した気持ちも急速に萎んでいくことを記している。

7) 昭和5年1月8日付岩田義道宛書簡『全集』25、199ページ。

8) 昭和5年5月19日付岩田義道宛書簡『全集』25、207ページ。

へ踏み出そうとしていた当時の河上の社会科学理論への思いをストレートに表現していたし、河上自身その立場に立とうとの意思がこの言葉を多用させることになったのである。

### III 洛北染物労働組合争議

河上がジョルジュ・サンドの言葉を書にしたためて檄文として贈ったのは洛北染物労働組合であった。

洛北染物労働組合は1930(昭和5)年4月から5月にかけて労働争議をたたかうが、河上はこの争議を「吾々が造つたばかりの洛北染物労働組合がストライキを起こしたので」<sup>12)</sup>と言いきって、自分のこととして積極的に支援する。松尾尊兌は、『河上肇全集』18巻の解題で河上が「1930年代の状況を『革命的昂揚の洪波が恐るべき勢で擡頭した時期』と誇張して書いているのには、この争議経験がはずかっているのかもしれない」<sup>13)</sup>と推測している。この争議の経過を概観し、河上がこの争議に具体的にどのようなにかかわり、彼自身が何を感じ、何を得ていたのかを書簡や『自叙伝』によって跡づけることにする。

#### 1 洛北染物労働組合争議の経過

洛北染物労働組合争議については、渡部徹編『京都地方労働運動史』(京都地方労働運動史編纂会発行、1959年、1586ページ)を参照して、これにもとづいて記述する。この『京都地方労働運動史』は、明治時代にまで遡り京都の労働運動と労働組合についてだけでなく、京都の労働者の状態や産業の状況、日本の社会労働運動や政治の動きなども視野に入れて第2次世界大戦の敗戦までを記述していて、明治以降の日本の社会労働運動史のなかに京都の労働運動史を鮮明に位置づけたものとなっている<sup>14)</sup>。

河上が京都帝国大学経済学部を辞職させられるのは1928(昭和3)年4月のことである。そ

の後、河上は書斎を離れ、実践活動に身を投げ出すことになるが、その直前の1928年2月に総選挙に立候補した労農党の大山郁夫の応援のために香川県に赴く。その応援行動に、河上の義弟で当時大阪の藤本ビル・ブローカ銀行に勤めていた大塚有章が同行した。大塚は河上の影響を受けて、その後、社会運動の第一線に身をおくことを決意し、1928年には河上宅に入り、河上の片腕としての役割を担った。洛北染物労働組合争議には大塚有章が深く関わり、彼がリーダーの一人となってこの争議を勝利に導いた<sup>15)</sup>。

大塚は、1930(昭和5)年1月2日に労農党本部の仕事のために河上と一緒に上京している。しかし、その後すぐに労農党の労働組合への影響力を得るために京都へ戻り、京都の友禅労働者の組織化のために奔走する。大塚の京都での活動については、河上が『自叙伝』で次のように記している。「京都から私と一緒に東京に移った義弟大塚は、マルクス主義の教養には不十分な点があつたけれども、いつも私の側にゐて最も誠実に私の身の上を考へてゐてくれたのだが、彼もまた、労農党本部がただ街頭の演説会をのみ能事としてゐる態度にあきたらなくなり、早く東京を見棄てて再び京都に帰り、そこで労働組合の組織に専心することにしてゐた。彼の驚くべき献身的努力によつて、京都地方の労働組合は見る見るうちに急速な拡大強化を遂げ、水の低きに就くが如く、海綿の水を吸ふが如く、未組織労働者は次ぎ次ぎに組合へ吸収され、その組織率は京都地方で嘗て例を見ないほどの成功を収めつつあつた。自然彼は、全く組合運動に没頭してしまひ、他事はこれを顧る余裕のない有様であつた。」(『河上肇全集』続5、358

15) この争議での大塚の評価については、「当時、日出新聞記者で、後運動に加わつた増田操は、この争議を、『純情な情熱漢大塚君にとっては初陣だった洛北友禅争議、ルンペンそのもののような友禅工をあそこまで一糸乱れぬ統制においたのは大塚君の持つ人格の力ではあつたが、策戦は多く朝田君あたりからでたもののように聞く。この道にかけては都下署長中の一人者根垣下鴨署長にとっては三歳の童子にも等しい彼であつた』と、評したりした(日出新聞、五・二九)。(『京都地方労働運動史』737ページ)と報じられた。

12) 昭和5年5月19日付岩田義道宛書簡、前掲書。

13) 松尾尊兌「解題」『全集』18、426-427ページ。

14) 1968年10月に「増補版」が刊行された。

ページ。)

大塚は京都へ戻ってから朝田善之助、白田銀市、金井健吉、中野健次、坂本秀雄、田中房次郎、立野正一、赤石円三郎らの活動家を仲間に取り入れ<sup>16)</sup>、洛北染物労働組合争議をたたかう。

当時の京都の友禅業は、九条、洛西（西院から西方）、洛北（高野から修学院）の三地域に分かれて並存していた。九条、洛西には早くから染物労働組合が組織されていたが、洛北の組織化は遅れていた。洛北友禅は広幅の反物が多いために、地元の職人が少なく、各地から集まってくる職人が多かった。特に朝鮮からの移民労働者がその主流を成しており<sup>17)</sup>、また、日本の各地から流れついた職人たちは、気が荒く、柄が悪いといわれ、これらの職人集団を統率して働かせるためには差別による分断と暴力的に従わせる手段が採用された。各工場には、職人を暴力的に取り締まる職長が置かれた。彼らは横断的にも連携して、職長の団体である「進励会」を結成していた。この職長から工場の親方＝経営者になる者も多く、洛北友禅の工場では、朝鮮移民労働者への差別的な労務管理と、職人の前近代的職人氣質を利用しての暴力的労務管理が横行していた。こうしたもて労働組合の組織化は困難な状況におかれていた。

大塚有章らはこうして未組織となっていた洛北の友禅労働者に目をつけ、その組織化のために動き出した。この地域は田中部落を擁していて部落解放運動の盛んな地域で水平社の影響力が強かった。朝田善之助はこの地域の水平社の活動家であった。大塚は、ここで労農党が影響力を持つ労働組合を結成することができたならば、労農党への労働者の支持が拡がり、部落解放運動の中にも影響力が及ぼせるものと考えた。

1929（昭和4）年の世界大恐慌の影響は、京都の友禅業界にも及んで工場主は深刻な不況に苦しんでいた。工場主は労働者の賃金切り下げ

によってこの苦境を切り抜けようと考え、洛北地域の友禅工場主が集まってその具体策を考えるための協議を始めた。一方労働者側は、大塚の指導もあって1930（昭和5）年4月17日、田中部落水平社夜学校で洛北友禅工場代表者会議を開催し、①賃金3割値上げ、解雇手当の制定、手待日当の制定、職工長の廃止、健康保険金の全額資本家負担、飯代3割値下げ、手待中の飯代資本家全額負担、社宅料の3割値下げ等の要求書を工場主に送ること、②洛北染物労働組合準備会を設立すること、③同じ地域（高野）にあって、これも経営者からの賃下げ攻撃に抗してストライキで立ち上がっていた鐘紡争議団に激励文を送ることを決めた<sup>18)</sup>。そして4月20日には洛北染物労働組合発会式を行い、24日に田中大久保町棚橋工場、田中古川町上治工場で団体交渉を要求したが、二工場の工場主は労働組合を認めず、要求についても拒否し、なお運動を継続するなら首を切るとの強硬姿勢を示した<sup>19)</sup>。労働組合側はこの回答を不満として、25日よりストライキに突入した。

この日、洛北の34の友禅工場主は、組合の要求はすべて一蹴することを決めたため、労働組合側はゼネストで対抗し、争議は拡大の一途をたどることになった。工場主の中には、争議の長期化は工場の機械、設備に損害を被るとの不安を感じて、工場の操業を再開することを望んで態度を軟化させ、労働組合を承認し、団体交渉にも応じようとする者も出てきたが、職長の団体である「進励会」は労働組合を認めることは、彼らの権威が失墜することになるとして強硬に反対した。

他方、労働組合側も争議の長期化は賃金が払われずに、生活そのものが窮することになって争議をたたかいぬくことは困難になっていたが、争議中の労働者の生活を補う費用は大塚が一部を工面し、労働組合員が行商隊を組織して生活を維持した。大塚は、争議費用を工面したことで労働者の信頼を得て、京都での労働運動への

16) 渡部徹編『京都地方労働運動史』京都地方労働運動史編集会、1959年、731ページ。

17) 何明生『韓人日本移民社会経済史一戦前篇一』明石書店、1997年、106-107ページ。

18) 渡部編、前掲書、732ページ。

19) 同上書、732ページ。

影響力を強めていくのであるが、この争議へは河上がカンパ等で経済的に大きな援助をしていた。大塚は河上からの援助を争議費にあてていたのである。

この後は、工場主よりも「進励会」が直接、労働組合と対峙し、双方に負傷者が出るほどに争議は泥沼化していく。膠着状態が続くなか、大塚の依頼を受けた労農党本部は争議団を激励するために河上を京都へ派遣する。河上は、5月13日に上洛し、田中の争議団本部へ入る。到着した日の夜、争議中の労働者に激励の演説を行い、15日から17日までの3日間、労働者を対象にした労働講座を開講する。16日には、労農党の大山党首も来援し、「午後7時より三条青年会館・京日講堂で争議批判大演説会を開催し」<sup>20)</sup>、ここでも演説を行う。河上は20日に東京へ戻る。

争議はその後も膠着状態が続くが、この間労働者側は工場主宅にデモを仕掛けたり、進励会側はヤクザを動員し車にドスを積み込んで威嚇のデモを繰り出したり、争議団に殴り込みをかけるなどの血なまぐさい事件が相継いだ。5月22日、業を煮やした下鴨署長の三度目の調停で、下鴨署において第5回めの労使会見が行われた。組合承認問題は後回しにして経済的要求から交渉に入り、手待日当制定の金額決定の条項以外はほとんど協定を見た。5月23日には、①作業所については、工場主に対し絶対迷惑をかけぬこと、②当分の間、職工賃金の値下又は値上はしない、③解雇手当制度については誠意をもって考慮する、④手待日当は他同業者の状況を調査し、誠意をもって早速実施する、但し、日当は精勤者にのみ支給し、且徒弟には支給しない、⑤社宅料の値下は、個々のものに付他の家賃と比較して適当に支給する、⑥今回の争議に付家族見舞金として金一封を支給する(700円)、⑦負傷者に対しては工場主より見舞金として金一封を各別に支給する(100円)、⑧形舟料は廃止する、⑨今回の争議につき職工及徒弟の解雇者

は絶対に出さない、との9項目から成る「覚書」を交わし、この種の争議としてはめずらしく、労働組合側に有利な条件で解決した。

#### IV 河上肇と洛北染物労働組合争議

次にこの争議と河上肇のかかわりを見ることとする。

前節で見たように河上は、この争議支援のために1930(昭和5)年5月13日から5月20日までの1週間、京都に滞在している。河上はこの年の1月2日に労農党本部の仕事につくために京都を発って上京した<sup>21)</sup>。労農党常任委員会から機関紙部員の指名を受けて『労働農民新聞』の編集を担当することになった。しかし、その直後の1月18日には、第17回衆議院議員選挙(2月20日投票)の京都一区候補者に指名され、選挙運動のために再び上洛することになる。この選挙に落選の後に東京へ戻るが、洛北労働組合争議が勃発し大塚の要請を受けて、その支援のためにまたしても上洛することになる。河上は5月13日に京都入りするが、その理由を岩田義道への手紙の中で「京都では最近吾々が造つたばかりの洛北染物労働組合がストライキを起したので、その応援に来たのです」<sup>22)</sup>と記している。

河上はこの労働争議のために5月20日までの1週間京都に滞在するが、その間、彼は精力的にこの争議の支援を行う。彼の支援活動は争議に参加する労働者を激励することと労働者としての意識を自覚させるための学習教育の講師活動であった。彼はこの争議支援のために京都へ着くとすぐに、田中にある争議団本部へ向かい、「争議団本部の楼上から屋外の大衆に向つて激励の演説」<sup>23)</sup>を行い、争議団の労働者を対象に15日から17日までの3日間「每晚労働講座をもつてゐる」<sup>24)</sup>。この労働講座については、『京都

20) 『京都日出新聞』昭和5年5月17日付。

21) 前掲の昭和5年1月8日付岩田義道宛書簡『全集』25, 200ページ。

22) 昭和5年5月19日付岩田義道宛書簡『全集』25, 207ページ。

23) 同上書。

24) 同上書。

日出新聞』(昭和5年5月16日付)が「十五日午後八時、田中古川町の洛北友禅争議団本部で午後七時半労働農員に守られた博士のやせた姿があらわれた。博士の『笑わない顔』がにつとほほえんだ。博士の労働講座第一日目「労働者は何故貧に苦しみ何故資本家は富むか」を生きた実例で説明する。しはぶき一つきこえない。その一言一句が情熱だ。午後十時半博士はその第一日の講義を終った」と報道している。さすがに京都の地元新聞である。河上を京都が生んだ学者として誇り、その報道の仕方にも善意といたわりが感じられる。

それにしても、河上は争議団支援のためにその本部まで赴いて、労働者を励ます演説だけにとどまらず労働講座をも開講したことに驚嘆する。二年前までは大学の教室で講義を行い、研究室に身を置いて経済学を研究していた京都帝国大学の教授である。51歳の年齢も当時としては決して若くはない。社会的な名声があり、円熟期にあった人物が、争議団本部まで直接向いて争議中の労働者を励まし、労働講座を開講してその講師までつとめる姿に感動すると同時に敬服する。これらのことは河上を語る場合にすでに様々なところで言い尽くされてきたことではあるが、改めて知識人、人間としての有り様を問うものとして心に留め置かなければならない。

河上は、この争議への参加の様子を津田青楓宛の手紙の中で「一度お尋ねしたいと思ひましたが、滞在中二日は全くのテツ夜で、その他の日も何彼と用事があり、それでなければ疲れてねてゐるといふ調子で、たうとう失礼いたしました。二十日の朝(前夜テツ夜の後を受けて)三特に投じ、帰東いたしました。』<sup>25)</sup>と書き、林要宛の手紙では「私は過日貴地の洛北染物組合の争議応援のため出掛け約一週間滞在いたしましたが、二日ばかりは純粹の徹夜などしたために、選挙の時よりも遙かにカラダにこたへ、帰東後右腕の神経痛のため昨日までは仕事を休ん

でみました。』<sup>26)</sup>と知らせている。争議支援で徹夜をして無理をし、疲れはてて右腕の神経痛に悩まされていると書いているが、それは争議支援への参加が原因していても二度とこうした実践活動には参加しないということではなかった。むしろ、先に参照した岩田義道宛の手紙にもあったように、当時の河上は、実践活動への参加を誇っていたのである<sup>27)</sup>。

また、河上はこの争議で、直接争議団を訪れて労働者を激励しただけでなく争議団に参加した労働者の生活を維持するための資金カンパの協力も精力的に行った。自らが資金カンパをするだけでなく、色紙等を書いてそれを知人に送り、その代価として資金カンパを依頼することまで行っている。林要宛の手紙で、「洛北争議団の方へは、私としては相応以上の資金も寄附したのですが、まだ中々足りないの、近々百枚位の色紙および扇子を書いて送ることになってゐます。それで甚だ躊躇しながら申上げるのですが、お送りしたものに対する代価といふ意味では無論ありませんが、この際五円でも十円でも寄附して下されば甚だ仕合せに存じます。色々政治上の意見の対立もある事ゆゑ、御迷惑とは存じますが、もし願をお容れ下さいますならば、お序の折田中大堰町二十末川博方、大塚衛へお届け下されば、——その際御注意おき下さるかぎり、——御姓名は他へ漏れぬやうにお取扱する筈であります。』<sup>28)</sup>と寄附を依頼し、津田青楓には「洛北争議団のため私は二百円あまりと外に色紙扇子百枚を書くことになりました。大山氏も百枚書いてくれる筈です。申兼ねますが、四五枚でよいです。書でも画でも色紙をキフして下さいれば幸甚です。いづれお願する必要があるれば党の者がそのために参上いたします。』<sup>29)</sup>と書、画の色紙を求めている。

河上がこの争議にこれほどまでに積極的に関

26) 昭和5年5月27日付林要宛書簡『全集』25、209ページ。

27) 昭和5年6月23日付岩田義道宛書簡『全集』25、210-211ページ

28) 昭和5年5月27日付林要宛書簡『全集』25、209ページ。

29) 昭和5年5月22日付津田青楓宛書簡『全集』25、208ページ。

25) 昭和5年5月22日付津田青楓宛書簡『全集』25、208ページ。

わろうとした背景には何があったのであろうか。先述したように、河上が知識人として社会・労働運動への関わり方を真剣に追求した帰結としてあったのは明白であるが、同時にこの当時の労農党の大衆基盤の弱さを批判し、大衆的な運動に支えられる幅広い「新労農党」を結成しようと考えていたことも挙げられる。これは大塚有章も同じ考えで、河上は後に『自叙伝』のなかで「彼（大塚＝引用者）もまた、労農本部がただ街頭の演説会をのみ能事としてゐる態度にあきたらなくなり、早く東京を見棄てて再び京都に帰り、そこで労働組合の組織に専心することにしてゐた。彼の驚くべき献身的努力によつて、京都地方の労働組合は見る見るうちに急速な拡大強化を遂げ、水の低きに就くが如く、海綿の水を吸ふが如く、未組織労働者は次ぎ次ぎに組合へ吸収され、その組織率は京都地方で嘗て例を見ないほどの成功を収めつつあつた。』<sup>30)</sup>と書いて、大衆運動を基礎とした新労農党の新しい組織形態の積極的な意義をこの争議支援の成功に見出そうとした。また、河上はこの洛北染物労働組合の争議支援を、岩田義道宛の手紙に「京都では最近吾々が造つたばかりの洛北染物労働組合がストライキを起したので、その応援に来たのです。』<sup>31)</sup>と書いて、洛北染物労働組合が「吾々」の労働組合であることを強調している。

そしていまひとつは、河上がこの時期を世界恐慌からくる革命期と規定していたことである。松尾は、河上が「1930年代の状況を『革命的昂揚の洪波が恐るべき勢で擡頭した時期』と誇張して書いているのには、この争議経験があざかっている」<sup>32)</sup>としてその争議体験が河上に与えた影響の大きさを指摘しているが、河上にとって、この時期はまさに革命前夜であり、書齋にのみとどまることは許されなかったのである。

河上が洛北染物労働組合争議へ深く関わった

背景にはこれらのことが考えられる。

## V 檄文の書かれた時期

この時期、河上はマルクスが『哲学の貧困』の結句として用いたジョルジュ・サンドの言葉を、好んで演説の中で引用したり色紙に書いたりしている。河上にとってこの言葉は、書齋から脱して実践活動へという思いと覚悟を端的に表現するものであった。

今回、吉村久美子さんから寄贈された河上直筆の檄文は、洛北染物労働組合に贈られたもので、河上が実践活動に踏み込んだ時期のものである。これが書かれた時期は、河上が洛北染物労働組合争議の支援のために京都に滞在した1930（昭和5）年5月13日から20日までの1週間の間と推測できる。この檄文については、京都府立総合資料館編、天野敬太郎監修『河上肇文庫目録』（収集資料月報別冊18号、1974年12月）に寄託資料として目録が採録され、河上肇記念会、京都府立総合資料館編『河上肇遺品展図録』では写真と解説が掲載されているが、この檄文が書かれた時期を両方のいずれもが昭和6年としている。昭和6年としている根拠は示されていない。

二つの目録に記された昭和6年という年は、河上が洛北染物労働組合争議を終えて、すぐに新労農党解消問題に巻き込まれ、それに嫌気がさして書齋に戻る時期にあたっている。河上は『自叙伝』で当時のことを、昭和5年11月4日付羽村二喜男宛の手紙を引いて「私も愈々、労農党から出ました。過日の拡大中央委員会では、もし出席してゐたら殴られたかも知れぬのですが、入口で検束されて却て大仕合せ致しました。実は此上もない幸運でした。これで一と片付きましたが、まだ跡始末について責任がありますので、もう一ヶ月位新聞を続刊します。それを終へたら、今度は一切他との交渉を絶ち、残生を筆硯の間に費す決心です。最初からその方針を取ればよかつたのですが、それでは私の良心が安まらず、引目を感じざるを得なかつたのですが、今度は安んじて（傍点原文のまま）

30) 『自叙伝』自画像、『全集』続5、358ページ。

31) 昭和5年5月19日付岩田義道宛書簡『全集』25、207ページ。

32) 松尾尊允「解題」『全集』18、426-427ページ。



書齋にとちこもりうる事とぞんじます。たいして御心配をかけるやうな事はもはやあるまいと考へてをります。何にしても情勢が複雑で、私のやうな者はとても手も足も出されぬものだと云ふことが、よく納得できました。書齋での仕事なら自信がありますし、間違もたいしてせず済むと思ひますから、今度こそは落ちつきうると考へてをります。』<sup>33)</sup>と回想している。

実際に河上は、1930(昭和5)年10月に労農党を除名されてから1933(昭和8)年1月に逮捕されるまでの地下生活を記述した『自叙伝』「労農党解消後地下に入るまで」のなかで、「労農党の解消運動を了へてから、実際私は、羽村宛の手紙に予告して置いた通り、『資本論』の翻訳と傍らまた『資本論入門』の最終的な改作のため、暫く夢中になつてゐた」<sup>34)</sup>と書き、翌年の1931(昭和6)年6月1日付羽村二喜男宛の手紙では「これからは京都へ参るにしても、外部的な運動とは全く無関係に、遊びに参るか、さもなくば図書館を利用しに参るか位のもです。』<sup>35)</sup>と書き送っている。さらに『自叙伝』ではその手紙を引用して、「どうしても安んじて書齋に落ち着くことのできなかつた私は、この昭和六年といふ年になつて(私はその時五十〔三〕歳になつてゐた、)初めて良心上の不安なしに書齋に閉ぢ籠りうる心境に達した。『余念なき日夜の劳作、この頃くらゐ心の落着きを感じてゐることは、近来稀です。』といふ言葉は、如何に私が仕事に夢中になつて静かに満足感に浸つてゐたかを、如実に表現してゐる。』<sup>36)</sup>と回想している。しかし、河上の波瀾万丈ともいえる人生はこれで終わることなく、「ところで漸く『資本論』第一巻下冊の訳稿が清書され了つて、私はすでに第二巻の翻訳に着手してゐた頃に、急に家を出ねばならなくなり、

それきり此の仕事も中断してしまつた。これで私の『資本論』翻訳は永久に葬られたのであるが、何事につけても思ひ切りのよい私がいればかりはその後いつまでも諦められず、すでに検挙されて獄裡に生活するやうになつてからも、愈々諦め切るまでには長い時日を要した。……労農党解消後、昭和六年の春、再び書齋に戻つた私は、遂にこのころのふるさとで老い果てることが出来ず、早くも昭和七年の夏になると、また書齋から這ひ出』<sup>37)</sup>ざるを得なかつたのである。

ここでは、「闘争か然らずば死か 血みどろの戦か然らずば無か……」の洛北染物労働組合へ贈られた檄文がいつの時点で書かれたのかを推測するために、昭和6年頃の河上がおかれていた状況とその心境を知ることが目的であるからこれ以上の深追ひはしないが、京都府立総合資料館編の『河上文庫目録』と『河上肇遺品展図録』がこの檄文を書いたとした昭和6年は、これまで見てきたように河上が、実践運動の第一線からは退いて『資本論』の翻訳と『資本論入門』の改定を行うために書齋にもどつて、その仕事に没頭しようとしていた時期であつた。

河上が書齋を脱して実践活動に踏み出すのは、京都帝国大学の教授を辞職させられた1928(昭和3)年4月であつた。それから2年半後の1930(昭和5)年11月4日付の羽村二喜男宛の手紙では、労農党の解消問題に直面し、自分は実践活動には向いていないから再び書齋に戻することを決意すると書いた<sup>38)</sup>。この2年半が、河上が自らの意志で実践活動に参加した時期であり、この時期の河上の心境とその昂揚を最も良く反映したのが「闘争か然らずば死か 血みどろの戦か然らずば無か……」の言葉であつた。この檄文は、河上が洛北染物労働組合争議支援に参加したなかで書かれたとするのが妥当であらう。

33) 「自叙伝」労農党解消後地下に入るまで、『全集』続5、394ページ。

34) 同上書、396-397ページ。

35) 昭和6年6月1日付羽村二喜男宛書簡『全集』25、238ページ。

36) 「自叙伝」労農党解消後地下に入るまで、『全集』続5、405ページ。

37) 同上書、443ページ。

38) 昭和5年11月4日付羽村二喜男宛書簡『全集』25、222ページ。

## VI おわりに

この小論は、吉村久美子さんから河上肇直筆の軸装が河上肇文庫へ寄贈されたのを機会に、この軸装が書かれた直接の原因である洛北染物労働組合争議と河上肇との関係を調査して叙述してきた。一つの軸装から河上肇が実践活動に身を置いた時期の具体的な行動や思い、周りの人々、社会の状況などを明らかにすることができた。今回の作業によって、一片の資料が様々

なことを語りうることを身をもって実感した。

河上肇文庫には、河上が所蔵した図書や雑誌はもちろんのこと、講義ノートや手稿類、日記、手紙等が保管されているが<sup>39)</sup>、今回、この文庫に新たに軸装が寄贈されてその内容を充実させることができた。京都大学経済学研究科は、河上肇文庫の資料を学外にも広く公開し、有効に活用されることを目的として、その公開方法についてデジタル化による Web 公開を含めて検討をはじめた。そのことを付記して稿を終える。

39) 京都大学経済学部『河上肇文庫目録』1979年3月。